
暗雲の壁

三音 光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暗雲の壁

【Nコード】

N6159J

【作者名】

三音 光

【あらすじ】

この世界を守る為に異世界から来た男は、爆発に巻き込まれ記憶を失くす。

この世界で愛した人の記憶だけを残して…

そして、異世界での恋人である女性と再会し、男の素性が語られる。

男と同じ爆発に巻き込まれた女性は、愛した男の記憶を失くし、運命のままに男と戦う。

それぞれの愛は2つの世界で記憶と運命に翻弄され、戦ってしまう

3人の男と女。

真実の愛は、何処にあるのか…

愕（おどろ）きの出会い（前書き）

暗雲の壁

二つの世界があつた。

光と影のように対なる存在だつた。

ひとつの影は光を飲み込もうとする存在。

ひとつの影は光を護る存在。

光はまだ、影の存在を知らずにいた…

愕（おどろ）きの出会い

愕（おどろ）きの出会い

夕暮れ時の街で、男は人の間を縫うように走っていた。

急ぐ余り、色を変えそうな信号に視線を奪われ、しかも歩道から斜めに横断歩道へと向かった男の足は、歩道の縁石に払われ、男の体は宙を舞った。そのまま横断歩道をこちらに向かって歩いてきた女性にぶつかり、からみあつて倒れこんだ。…と、同時にすぐ後ろで激しい急ブレーキの音と共にトラックが通り過ぎ、歩道に止まっていた数台の自転車突っ込み押しつぶしながら止まった。暫く啞然とトラックを見ていたが、自分の体を圧迫している柔らかな感触に、女性の上に乗っている状況を把握した。女性は目を閉じたまま動かない。口元に手を翳すと呼吸が感じられた。

いつの間にか周囲は、かなりのやじ馬が集まり男を視線で囲んでいた。点滅する青信号が目に入ると男は慌てて女性を抱き上げ、横断歩道を渡った。男を受け止めてくれた（？）女性のお陰なのか男には怪我はおろか、痛みすらなかった。女性はピンクのワンピースを着ており、背中まである煌めく髪は風に煽られ、男の顔に触れると、媚薬のような甘い香り漂わせていた。自分が一生かかっても触れることはないだろう…と思われる、その端正な横顔を男の腕にあずけていた。

横断歩道を渡り終え辺りを見回すと、歩道にいた人々が男に尊敬の眼差しを向けていた。拍手をする者までいる。『トラックに轢かれそうになった女性を助けたんだって…』

何処からか、そんな囁きが聞こえてきた。まさか、歩道の縁石に躓いてこの女性にぶつかりました…とは、いまさら言えず照れ笑いで逃げるように囲む人をすり抜けた。

歩道のベンチを見つけ女性をベンチにそつと降ろし立ち上がると携

携帯電話を取り出し救急車を呼んだ。

対面の歩道をみると、歩道に乗り上げ自転車を薙ぎ倒したトラックが下敷きになっている自転車道をさらに押しつぶし、後ろに下がり車道に出ると、猛スピードで走り去ってしまった。

とっさにトラックのナンバーを覚える…など、という高等技術を持ち合わせていない男は、轟音の残響を聞きながら茫然と走り去るトラックを見ていただけだった。

車内は聞き取りにくいノイズが混じった無線が、やけに耳障りに感じた。警察の車の後部座席に座っていると、なぜか罪を犯したかのような錯覚におちいる。

「お名前は、タカフジリユウスケさんで宜しいのですね？そうすると、鷹藤さんはあの女性とは面識がないのですね？」

助手席で調書を取りながら警察官が訊いてくる。話の途中で無線が入り、中断した為に同じ質問を3回訊ねられた。「しかし、凄いですねトラックに轢かれそうになっている女性を、飛び込んで助けるなんて、私たちでも躊躇ってしまいますよ。」

どうやら、現場の聞き込みで得た情報らしいが、『躓いて転んだ弾みで女性にぶつかりました』と言うのも気が引けるといつか、いや、もしかしたら傷害で逮捕されるかもしれない？などと余計な事ばかり考え、いまさら言いだすことが出来ずにただ、頷いていた。

（あの女性は、大丈夫だったかな？そろそろ病院に着いた頃だろうか）

ふと考えながら女性の顔を思い浮かべた。

（それにしても美人だったなあ、ずっと気を失っていたから何にも覚えていないんだろうな…）

短めの溜息が漏れ、項垂れた。

調書を取り終え釈放…いや、解放された時には街並みは夜の帳を纏い、煌びやかなイルミネーションが瞬いていた。ふと、空を見上げると街の灯りに邪魔され闇を纏えない雲が蠢いていた。その存在

を気付かれないように…その先にあるものを隠す壁のように…。龍輔は足を止め暫く空を見ていた。夜空の雲に何かを感じた気がしたが…。

大勢の人達で様々な会話が飛び交っている賑やかな居酒屋に着いたのは、待ち合わせの時間から2時間が過ぎていた。救急車を呼んだあとに、電池の尽きた携帯電話には待ち合わせの相手に連絡することを拒否されていた。

店の中を見回すとこちらにむかつて手を挙げる友人を見つけた。とりあえず遅れた原因をありのまま話したが、この店のお勘定を男が払うことは免除されなかった。理由は遅れた事より若い美人の女性を抱いていた(?)…事らしい。再び男の脳裏に蘇った女性の端正な顔立ちと、腕にまだ残っている柔らかな感触を思い出すと断る理由を言うほどではないかと諦めた。友人たちはその女性の写メは取らなかったのか…とか、連絡先は訊いたのか…とか…セクハラ丸出しの会話で盛り上がっていた。そういえば、あの女性に怪我は無かったのかと今更ながら思ったが、確認するすべがない事に気づき、何故かまた浮かんだ女性の顔を掻き消すかのように、ビールを一気に流し込んだ。

耳障りな音が男を休日の朝の幸せな眠りから強制的に覚醒させる。昨夜の酒と睡眠不足で開くことが困難な目を開けられず、手探りで目覚まし時計を掴みボタンを押した…しかし耳障りな音は、まだ止まっていなかった。無理やりこじ開けた片目でベッド脇のテーブルを見ると、携帯電話のランプが光っていた。昨夜の酒がまだ残っている重苦しい体を起こし携帯電話を手に取り着信ボタンを押した。

「もしもし、鷹藤龍輔さまでいらっしゃいますか？」

上品で綺麗な高音の優しそうな声だった。まだ覚醒しきれていない頭にまるで耳元に囁かれるように流れてきたが、聞き覚えのない声

だった。

「はい、そうですが…どちらさまでしょうか？」

いかにも、二日酔いで寝起きのような声で答えた。

「突然のお電話で申し訳ございません、わたくし、寿々城 美奈萌と、申します」

（…すずしろ みなも？）

考えても記憶には無い名前だった。

「昨日助けて頂きました者です、ご迷惑かとは思いましたが警察の方にお礼を言いたいと申しましたら、鷹藤さまの連絡先をお教え頂きましたのでお電話をさせて頂きました」

（助けて頂きました？…）

「あつ」

端正な顔立ちの女性の顔が再び浮かんできて、二日酔いの頭は急激に覚醒した。

「本当に有難う御座いました、もし御迷惑でなかったらお会いしてお礼を申し上げたいのですが…本日の御都合は如何でしょうか？」
「ご都合と云うほどのものが殆ど思い浮かばなかった。それに、『実は、あれは縁石に躓いてあなたにぶつかっただけです』 ともいえず、

「いや、お気になさらずにそんな大層な事ではありませんから」と、つられた様に敬語になってしまった。

「そんな事は御座いません、鷹藤さまに助けて頂けなければ今頃わたくしは…、お時間を作って頂けるのであればお礼を申し上げたいのです」

2度のお願いを断る勇気がない事と、もう一度会ってみたいという不純な考えに勝つものを見つけれずにいると、
「お時間は取らせませんのでどうか会っていただけませんか？」

との、彼女の問いかけに、

（最近、女性から会ってくださいと言われる状況に遭遇していないな…）

と、寂しい自分を発見してしまった龍輔だった。

（それにしても鷹藤さまって…どこかのお嬢様なのか？）

くだらない事を考えていると、追い打ち？を掛けるように、

「お願い致します」

3回お願いされて断るなんて、もったいない…いや、男がすたる？
自分に変な言い訳をして

「わかりました、では何時くらいがよろしいですか？」

その女性は、ちょっとだけ上から目線の言葉を気にする事もなく時間と場所を伝えると最後まで聞きなれない敬語で礼を言つと電話を切った。

久しぶりに着ていく服を考える事にかなり疲れたのか、それとも昨夜の酒がまだ残っているのか、龍輔は重い身体を待ち合わせのレストランの椅子にあずけていた。素敵な女性との待ち合わせという所為か20分程早く着いてしまった。

このレストランの存在は知っていたが、龍輔には来る必要に迫られた事がない高級なレストランだった。入口の扉を開けるとファミレスの制服とは明らかに質の違う制服？を着たウェイターが龍輔に向かってきた。

「鷹藤さまですか？」

と、確認すると、龍輔はテーブルが1つだけの広めの部屋に案内された。

（スーツを着てくるべきだったか？）

と考えていると、部屋の扉から申し訳なさそうなノックがあり、返事をするると開いた扉から、昨日助けた…いや、ぶつかった女性が入ってきた。龍輔は、一瞬…見惚れた。

「初めまして、わたくしは寿々城美奈萌と申します、わたくしからお誘いしたのに遅れて申し訳ございません」

と、深々と頭を下げた。背中まで伸びた煌めく髪が彼女の背中を左右に分かれ流れ落ちる。

「私も今来たばかりですので、お気になさらずに」

と、社交辞令的な言葉に

「有難うございます」

と、美奈萌が顔をあげた。笑顔を纏った女性の顔に思わず衝撃的で少年のような…トキメキ？を感じた。さらに美奈萌の動きに柔らかく揺れるレモン色のワンピースが龍輔をドキドキさせた。

美奈萌は椅子に座らず龍輔に近づくと隣に立ち、

「鷹藤さま、本当に有難う御座いました」

と、再び深々と頭を下げた。美奈萌の煌めく髪は近づいた事により、媚薬のような甘い香りを漂わせていた。龍輔は何も言えずただ、美奈萌に見惚れた。ふと、我に振り返り頭を下げたままの美奈萌を椅子に座るよう促した。

控えめなノックがあり、美奈萌が返事をするとうエイターが入ってきた。明らかにファミレスとは違う洗練された動きのウエイターが「お飲み物は如何いたしますか？」

と、訊ねてきた。

「お飲み物はワインで宜しいですか？」

美奈萌に見惚れていた龍輔は、驚きのあまり『はい』と、答えていた。

「いつものをお願い致します」

（いつもの！？まちがいない、この女性はどこかのお嬢様だ）何を根拠にしているのか判らないが、そう思い込む龍輔だった。

テレビでしか見た事のないようなスタイルでグラスにワインを注ぐウエイター、まさに、茫然自失。一礼をして立ち去るウエイター。美奈萌はグラスを手にとると目線の高さにとめた。龍輔は慌ててグラスに合わせると高音の綺麗な音が長めに鳴った。

「鷹藤さま、本当に有難う御座いました」

微笑みながら優しい眼差しを向ける美奈萌。

「本当にお気になさらずに、それに…鷹藤さまって言うのは非常に…照れます」

優しい眼差しから目を逸らして、俯きながら言うと、くすつと、少女のように彼女は微笑んだ。

美奈萌は、病院に運ばれた後の事を話した。怪我は無かったらしく、検査をした後すぐに帰れたそうだ。事故の現場に彼女の友人がいたらしく、その時の様子を聞かされたらしい。龍輔が縁石に躓いて彼女にぶつかった事はその友人も知らなかったらしい。龍輔は美奈萌の話を聞きながら…

（ワインは男が注ぐ…だったかな？）

と、余計な気をまわし彼女のグラスにワインを注ぐ。

二日酔いの腹には、かなりきつかった食事をなんとかたいらげ、2本目のワインが運ばれてきた。彼女の頬はうつすらと赤みがかっていた。龍輔も酒は弱いほうではないが軽い酔いを感じて気分がよかった。

「鷹藤さま？」

美奈萌が訊ねてきた。

「もし宜しければ、もう少しお付き合いしていただけますか？」

彼女の誘いを断る理由を持ち合わせていなかった事と、少し酔ったせいもあって2つ返事で了解してしまった。

二人を乗せたタクシーは夕暮れの街を走っていた。それにしてもさつきから感じる左腕の感触は…と、左腕を見ると美奈萌が龍輔の腕をそつと触れていた。しかも軽く寄りかかって目を閉じていた。

「大丈夫ですか？」

龍輔の心配に目を閉じたまま美奈萌は頷いた。彼女から漂う香りは媚薬のように龍輔を夢心地にさせている。

「お待たせいたしました」

運転手の声に美奈萌は眼を開け、開いたドアから降りた。タクシー代を払おうとすると

「もう、いただいております」

笑顔で運転手が答えた。先ほどのレストランでも同じ事を言われて

いた。

車を降りると美奈萌は腕を組んできた。彼女から漂う媚薬？の所為で、彼女の腕を振りほどく事すら忘れ美奈萌を見ていた。彼女は目の前に視線を向け

「わたくしはこのホテルに滞在しているのですが、ここでもう少しお付き合ってくださいね」

いつの間にか彼女の言葉が、お願いからおねだりに聞こえるのは、酔った所為だろうか…と考えたが、まあ、いいかと美奈萌に腕を組まれたままホテルの入り口に向かった。

ホテルに入ると、かなり解放的な空間が広がり、吹き抜けの天井には煌びやかなシャンデリアが輝いていた。この街でも5本の指に入る程の高級という肩書きがつくホテルだ。エレベーターに乗ると美奈萌は最上階のボタンを押した。チャイムと共にドアが開くと目の前に扉は一つしかない。

扉の横にはホテルマンが立っていて

「お帰りなさいませ」

と、扉を開けた。どうやらホテルのバーでもなさそうだった。

（訊いた事はあるが、もしかすると此処は…ペンthouseと呼ばれるところ…かな？）

扉を入ると、見回すほど広い部屋にソファとテーブル、壁には龍輔の部屋の数倍はあるかと思われる薄型の液晶テレビが置いてあった。その奥の枚数を数えなくなるほどの窓に街の夜景が煌めいていた。ドアを開けるとベッドが見える。ビジネスホテルしか泊った事のない龍輔には驚きだった。部屋の中を珍しそうに見ていると、彼女は部屋の電話で話しをしていた。窓際に近づき、ふと、空を見た。町の灯りに邪魔され闇に溶け込む事が出来ずにいる雲が蠢いていた。嫌な感じはなく、何かを感じて空を見てみると、

「御免なさい、フロントにルームサービスを頼みましたので、こちらにお掛けになってもう少しお待ちください」

と、美奈萌が、見た感じで身体が半分は沈み込むのではないかと思

われるソファーへと龍輔を座らせた。

二つのグラスが触れ、綺麗な音を立てると、灯りを纏い煌めく気泡がグラスの中で弾けていた。殆ど飲む事のないシャンパンは彼女との会話に気を取られて2本目が空になった。龍輔の酔いもかなりいい感じになっていた。

「寿々城さん、私はそろそろ・・・」

驚く音と共にシャンパンが開けられ龍輔の声は、彼女に届かなかったようだ。彼女もかなり飲んでいたが頬に少しだけ朱を散らしたただけで、言葉も姿勢もしっかりしていた。龍輔は話を続ける彼女を見続けていた。途切れそうになる意識を繋ぎ止めながら...

見慣れない天井が目の前にあつた。

暫くして、思考が働き始め慌てて身体を起こした。：いや、起こそうとしたが何かがそれを妨げた。龍輔に掛かっている布団が腹部のあたりから不自然に膨らんでいた。布団を捲ると：媚薬のような甘い香りが舞い上がり、窓から差し込む光を纏い、煌めくサラサラの髪が現れた。その端正な寝顔は、寿々城美奈萌だった。

美奈萌は龍輔の身体にしがみつきながら静かに寝息を立てていた。龍輔は：暫くの間その女神のような横顔に見惚れた。

どのくらいの時が経ったのか、突然目を開けた美奈萌の視線と龍輔の視線が繋がった。

「御免なさい・・・」

慌てて飛び起きた美奈萌はベッドの横で軽く頭を下げると部屋から出て行った。龍輔はベッドから降りた。動くたびに美奈萌の甘い香りが纏わりついてくる。

着替えた龍輔がベッドルームから出ると、リビングのソファーに身体を沈めた。美奈萌の姿は見えない。テーブルの上の灰皿を見て思い出したように煙草に火をつけた。こんなに清々しく少年のようにときめく朝を迎えたのは何年振りだろうか。2本目の煙草を吸いながら思いにふけていると、控えめなノックが数回なった。煙草

を灰皿に押し付け立ち上がろうとすると、龍輔がいたベッドルームの隣の部屋のドアが開く。グレーのニットのワンピースを着た美奈萌がこちらに向かって一礼すると、黒のストッキングにひざ上まである黒のブーツで包まれた足は入口のドアに向かった。

美奈萌が朝食の乗ったワゴンを押して現れた。ルームサービスを頼んだらしい。龍輔の前にあるテーブルにコーヒーを置きながら、「昨夜は申し訳ありませんでした」

と、少しピンク色の頬で照れたように俯きながら言った。龍輔は返す言葉が見つからず、笑顔を返してコーヒーを口に運んだ。テーブルの上に朝食を並べた美奈萌は、龍輔の隣に腰を下ろした。丈の短いワンピースは座ることで、さらに覗く足に引き込まれそうになった。龍輔は視線をそらした。

美奈萌に勧められ朝食を口にしてしていると、

「実は…あなたに…龍輔さまに助けて頂きたいのです」

美奈萌は龍輔の返事を待たずに続けた。

「先日の事故は偶然ではないのです。あのトラックは私を狙っていました。昨夜もあの者達の気配を感じ、龍輔さまの部屋に逃げ込み、貴方の力で私の存在を消して頂きました。そして、これから先もあの者達は、私を狙ってくるでしょうあの者達が貴方の存在に気づく前に、お連れしたい所があるのですが、いらっしゃっていただけませんか？」美奈萌は縋るような視線を向けてきた。龍輔は混乱する頭を整理できずにいた。

「…貴方は、一体…」

何を訊ねていいのか分からず言葉は途切れた。

思慕（しば）（Saudade（サウダーヂ））

思慕（しば Saudade（サウダーヂ））

鈴元南美には、初めから分かっていた。

この男が、私の心になど目を向けていない事を…ただ、自己の欲求を満たすためだけに会っている事を。例えうわべの優しさでも、押し潰されそうな孤独感に満たされていた今の南美には必要だった。南美は隣で静かな寝息をたてる男の横顔をじっと見ていた。

半年前に別れた男も似たような感じだった。好きな男には尽くし過ぎ、従順な南美には、男が他に女を作って捨てられるまで、自分は愛されていなかった事に気がつく事はなかった。それから枯れることを知らない涙で南美の心は彷徨い、酒に溺れる日々を送っていた。そんな時だった、彼に出会ったのは…

その夜も南美は、バーのカウンターでひとり飲んでいた。カウンターにはサラリーマンらしい二人の男が南美の右側に離れて座っていた。酔いが進むと理性が崩れ去り、涙が南美の頬を伝う。南美は気がつかなかったが、二人のうちのひとりが南美を見ていた。暫くするとその男達は会計を終え立ち上がった。そして南美を見ていた男が南美の後ろを通り過ぎる。…と同時に南美の左側のカウンターの上にそっとハンカチを置いた。南美の視線がそのハンカチに移り、後ろを振り返った。ハンカチを置いて行った男は振り向かず、そのまま店を出て行った。そのハンカチで頬を拭くと南美はマスターに訊ねた。

「今の方は、ご存知の方ですか？」
マスターは首を横に振った。

数日後、仕事帰りにいつものバーの扉を開けるとカウンターは半

分ほど埋まっていた。南美は右の端に座りビールを注文した。バッグから煙草を取り出し火をつけると一口吸いこみ、溜息と一緒に紫煙を吐きだした。いくら時間が経っても気だるい気分晴れる事は無く、虚しさだけが南美を包んでいた。いや、時間が過ぎたせいで何が南美を虚しくさせているのかさえ判らなくなっていたのかもしれない。その虚しさが酒を口に運ばせ、そして、酔いはいつものように悲しみが頬を濡らす。

突然、南美の左側から手が現れた。その手はハンカチをそつと置いた。南美は後ろを振り返る。男と視線が繋がった。男は優しいような笑顔を見せると何も言わず振り返り出口に向かう。南美はその背中を追った。背中越しに声をかけ、バッグからハンカチを取り出した。「あの…これ…貴方のハンカチですよ？…有難うございます」

そう言っていると、こちらを振り向いた男にハンカチを渡す。男は照れたように笑うとハンカチを受け取りポケットにしまった。

「よろしかったら…一杯御馳走させて頂けませんか？」

そう言った自分に南美は驚いた。

「お気になさらないください。ご迷惑かとは思いましたが、気障な真似をしてしまいました」

と、少年のような照れた顔に南美は見惚れた。

青空から降り注ぐ光に暖められた街を細めのウエスタンベルトを腰に巻き、エスニックな雰囲気のある黄色いブラウスにスリムのジーンズを身に付けた南美の足は軽やかだった。暗いバーのカウンターで泣きながら酒を飲んでいたら頃とはまるで別人だった。

待ち合わせの公園に入ると、彼がこちらに向かって手を振った。

彼は、バーで南美にハンカチを渡した男だった。「遅れてごめんなさい」

彼の前で軽く頭を下げた。

「いや、僕が早く来過ぎたのです。南美さんが誤らないでください」
困ったような顔で南美から視線を逸らして照れながら言う彼の言葉

に、頬が熱く感じ下を向きながら南美は頷いた。

何年振りだろうこんな心躍るのは、映画を見て、食事をして、街を二人で歩く…見えるものは全てが輝いているかのように映り、笑顔が止まらない。そう、まるで少女のようなトキメキが南美の鼓動を速めていた。南美は恋におちた…。

やがて陽が落ち、街並みは夜の帳を纏い、煌びやかなイルミネーションが瞬いていた。ふと、空を見上げると街の灯りに邪魔され闇を纏えない雲が蠢いていた。その存在を気付かれないように…南美は足を止め暫く空を見ていた。夜空の雲に何かを感じた気がしたが、彼の声で視線が空から離された。

「どうかしましたか？」

「いえ、なんでもありません」

頬笑みながら南美は彼の腕に凭れかかった。

レストランで飲んだワインで南美の頬は薄らと紅潮していた。心なしか頼りない無い足取りを彼の腕が支えていた。彼の腕に頬をあずけて、心地よい音楽のような囁きに身体が溶けそうだった。足を止め彼が南美を見つめる。酔った所為なのか、南美はそつと目を閉じた。彼の顔が近づき、南美の唇に柔らかく…優しく…彼が触れた…南美の身体は熱くなった。このまま時の流れを止めて欲しい、この先の時間全てを失ってもいいとさえ思った南美だった。南美は彼の温もりが残っている唇に指先を当て、熱くなる頬を彼に気づかれない様に俯いた。彼と腕を組みながら南美は頬を彼の腕に押し付け暫く夜の街を歩いた。

「南美さん…もしかしたら…」

彼がそう言いかけた時、南美の腕が突然後ろに凄い力で引かれた。何が起こったのかを理解する前に何者かが南美の身体を軽々と担いで走りだした。

「南美さん…」

彼の叫び声が聞こえ南美は担がれたままで頭をあげると、彼を取り囲んだ数人の男達と争っているのが見えた。南美を担いだ男は道路脇に止めてあった保冷車のようなトラックの後ろにまわり、扉を開けると南美を降ろしうつ伏せにして後ろ手に縛った。南美を押しこむと男は扉を閉め運転席に乗り込み、トラックを発進させた。暫く走ると急ブレーキでトラックが止まり転がる南美…そして柔らかいものにぶつかった。背中に柔らかい感触があった。

「大丈夫ですか？」

突然、南美の後ろから女性の声が聞こえ振り向き目をこらしたが暗闇で何も見えない。

「あなたは…？」

南美が訊ねる…と同時にトラックの扉が開いた。

「南美さん、大丈夫ですか？」

彼だった。

「皆さん早く降りてください」

トラックの荷台には女性一人と4人の男性が乗っていた。転がった南美を受け止めてくれるのは彼女のようだった。彼らも後ろ手に縛られ、足も縛られていた。彼はその人たちを降ろし、南美を縛っていたロープを解いた。南美は、縛られた人達のロープを解きながら彼のほうを見ると、彼は女性の足を縛っていたロープを解いていた。女性の視線は彼に向けられていた。彼が立ち上がり、その女性が何かを言おうと口を開いた。

「あの…」

彼女の言葉は、タイヤを軋ませ走ってきた車の轟音にかき消された。凄い速さで車が近づいてくる。車の窓から乗っている男の手には武器が抱えられ、ミサイルのようなものが発射された。

彼は目の前の彼女と、驚きのあまり動けなくなっていた南美を突き飛ばした。その瞬間ミサイルはトラックに命中して爆発炎上した。彼を巻き込み…

南美は爆風に飛ばされ失いかける意識の中で泣き叫んだ。

「リュウスケ……さん」
……彼の名を……

忘却（ぼつきやく）の過去

忘却の過去

龍輔は美奈萌に誘われるまま駅前にあるビジネスホテルのエレベーターに乗り込んだ。美奈萌はドアが閉まると鍵を取り出し、操作ボタンの下にある鍵穴に差し込んだ。鍵穴の下の手帳程の板がスライドして開き、赤いボタンが横に2つ並んでいた。美奈萌が左のボタンを押して鍵を抜き取ると、スライドした板は閉じた。

エレベーターの扉の上の階数表示はB2までしかなかった。表示がB2で止まったがエレベーターはまだ動いていた。暫くすると軽い振動と共にチャイムが鳴り、扉が開いた。そこにはエレベーターホールがあり一枚の扉があった。

美菜萌は先ほどの鍵を鍵穴に差し込んだ。しかし、先ほどと同じで鍵を回さず差し込んだだけである。暫くしてからドアノブを回すとドアが開いた。

誰もいないオフィスのようなあまり広くない部屋には机が数個並んでいた。机の上にはパソコンが置いてあり、何台かの電話もあった。部屋の右側にドアがあったが美奈萌は部屋に入ると、左の壁に向かって歩き出し、何もない壁の前で立ち止まった。美奈萌が向き合った壁の一部が音もなくスライドして開き、正面に伸びる廊下が現れた。

龍輔は剥き出しのコンクリートに囲まれた薄暗い廊下を美奈萌の後を付いて歩いた。廊下の奥のほうは暗さの為よく見え、廊下の両側には扉が一枚もなかった。暫く歩くと、廊下の突き当たりには扉があり美奈萌が開けた。鍵はかかっていないようだった。扉を抜けると左右に伸びる廊下に出た。先ほどの廊下とは違い、程良い明るさを確保された廊下の両脇には何枚かの扉があった。美奈萌は左に向かって歩き出し、何枚目かの扉の前で立ち止まると扉を開け、龍

輔を誘い入れた。右の壁際机が一つあり、座っていた警備員が視線を向け立ち上がった一礼し、美奈萌は軽く頭を下げるとその前を通り正面のドアに向かった。

美奈萌と龍輔が入った部屋の入口には、スチール製のパーテーションで仕切られた応接セットがあった。

「所長、鷹藤龍輔さまをお連れ致しました」

美奈萌が声をかけると、グレーのスーツを着た男が奥から現れた。男は龍輔に軽く一礼するとソファーに掛けるよう右手で促した。美奈萌に所長と呼ばれた男は、知的な顔立ちで表情を変えずに口を開いた。

「所長の黒河です」

そう言うと、軽く頭を下げた。龍輔も一礼してソファーに腰を下ろすと、その隣に美奈萌が座った。

「リュウさま、お待ちしておりました。ご無事だったのですね…よかった…」

黒河は龍輔の顔をじっと見つめる。自分を知っているような黒河だったが、龍輔は記憶を辿り考えてみても、初めて見る顔だった。

「あの…失礼ですが、どちらかでお会いしましたでしょうか…？」

と、訊ねる龍輔の言葉に続いて美奈萌が

「所長、龍輔さまは多分、記憶がまだ戻っていないようなのです。わたくしの事も覚えていないようですし…」

と、龍輔を見つめる。

「えっ…？」

龍輔の頭は混乱し続けていた。

「そうですか…まあ慌てる事はありません、暫くはここでごゆっくりなさってください」

黒河はテーブルのインターホンのボタンを押した。入口のドアがノックされ黒のスーツ姿の女性が入ってきて一礼する。黒河がその女性に告げた。

「龍輔さまと美奈萌さまをお部屋に御案内して下さい」

龍輔と美奈萌が案内された部屋は窓こそ無かったが、かなりの広さのリビングとベッドルームが2つあり、バスルームもあった。

「龍輔さまは、こちらのお部屋をお使いください。必要なものはわたくしが揃えておきましたので、必要なものがあれば何でもお伝えください」

一つの扉に掌を向けながら美奈萌が言うと、着替える事を伝え隣の部屋に入って行った。龍輔はソファーに座り煙草に火をつけ考え込んでいた。

（美奈萌や黒河と言った所長は、どうして俺の事を知っているのだろうか？間違いない初対面のはずだが…人違い？…ではないのだろうか？…）

美奈萌が入った扉が開き、袖口と襟と胸元のボタンのラインが白、グレーのワンピースを着た美奈萌が出てきた。身体にフィットしたその服は美奈萌の素晴らしいボディラインがはつきりとわかる。龍輔は視線を釘付けにされた。

「龍輔さま、お食事は如何いたしましたでしょうか？」

問いかける美奈萌の言葉に我に返って美奈萌から逸らした。リビングの壁の時計は12時を少し過ぎていた。

「美奈萌さんにお任せ致します」

そう言いながら龍輔は銜えていた煙草を灰皿に押し付けた。

食事が終わり、コーヒークップを持ったまま龍輔は訊ねた。

「美奈萌さん、なぜあなた方は私の事を御存じなのですか？私にはいくら考えてもあなた方の事が記憶にないのですが、何処かでお会いしているのでしょうか？」

その問いかけに美奈萌は少し考え…答えた。

「龍輔さまは、ミレニアル王国の王位継承者なのです」

（おいけいしゅうしゃ？…何の事だろう？…ん？…王国？…王位継承者？…？？？）

美奈萌は話を続けた。

「我が王国は、この世界を支配しようとするウインガル公国から、この世界を守る為に戦っています。しかし、前回の戦いの時にわたくしと数名の戦士を助けるために爆発に巻き込まれ…」

美奈萌声を詰まらせ、頬を伝う涙を拭いながら話を続けた。

「同じ場所にいた黒河が、咄嗟に転送装置を使い私たちはこの世界を後にしましたが、龍輔さまの搜索の為、わたくしと数名のものが再度この世界に戻り、龍輔さまをお探ししておりました。そんな時偶然にも龍輔さまが現れたのです。そして、わたくしを助けて頂きました」

そう話している美奈萌の瞳は涙で潤んでいた。

（俺が王子…何の冗談だろう？…でも…泣いているし…困った）

美奈萌は話を続けた。

「龍輔さまの本当の名前は、リュウ・ミレニアル・ファルクスと、申します。わたくしは、ミナモ・ルークヴェルクと言い、ルークヴェルク家の者で、リュウさまが率いられます部隊の一員でも御座います。先ほどお会いなさいました所長は、クロガ・カルシエル、リュウさまの部隊の指揮官で、他にも15名の隊員がここに居ります」
テーブルの上のインターホンのブザーが鳴った。 美奈萌がボタンを押すと所長の声が聞こえてきた。

「龍輔さま、もし宜しければ隊員にお会いしては頂けませんでしょうか？」

美奈萌は何も言わず龍輔を見た。

「もう少しだけ、時間をいただけませんでしょうか？」

龍輔が言くと、所長は了承して会話を終えた。

「龍輔さま、時間は御座いますからごゆっくりなさってくださいませ」

そう言いながら美奈萌は、龍輔のカップへ淹れたてのコーヒーを注ぎ、龍輔の前にそっと置いた。

美奈萌の言っている事は、頭では理解できていた。しかし、その話に出てくるリュウなる人物とどうしても自分が重ならない。

「美奈萌さん：俺の頭にある記憶には、美奈萌さんが話したりリュウという人物の記憶が存在していませんが、人違いではないのですか？」

龍輔の問いに美奈萌は答えた。

「わたくしたちは、この世界に來た時にこの世界の記憶を作り、ある装置でそれを頭に定着させます。そして、2つの記憶を持つのです。しかし、龍輔さまは負傷なされた時に片方の記憶、つまり、わたくしたちの世界の記憶を喪失してしまったのではないかと思います。その装置を使えば記憶を取り戻せると思うのですが、こちらの世界にはその装置がありません。しかも、私たちの世界に戻る為の転送装置は、ウインガル公国の仲間である内通者に破壊されてしまいました。現在、技術者達が装置の修復を行っておりますが、まだ、復旧の見通しは立っておりません」

龍輔はコーヒーマーを一口飲むと煙草を取り出し、火をつけながら考えました。

（彼女が嘘を言っているとは思えない、しかし……）
混乱する思考は、答えを出す事が出来ずにいた。

突然、テーブルのインターホンの赤いランプが点灯して、黒河の聲が響いた。

「ミナモさま、ウインガル公国の兵士の居場所が判明いたしました。急いで指令室にお越し下さい」

指令室と呼ばれる部屋に美奈萌と龍輔はいた。グレーを基調とした制服に身を包んだ数名の隊員がいたが、龍輔が指令室に入ると皆立ち上がり、龍輔に敬礼をした。

「リュウさま、数名の者が現地向かいました。我々も今から向かいますが、リュウさまは如何なされますか？」

黒河が龍輔に訊ねてきた。答えに困っている龍輔に美奈萌が、

「龍輔さま、わたくしがお守りいたしますのでいっしょに参りましょう。記憶を失くされていたとしても、今は龍輔さまのお力をお借

りしたいのです。」
「そう言いながら、制服を龍輔に手渡した。」

制服に着替えた龍輔が現れると、その姿に美奈萌は見惚れた。戦士たちは龍輔に向かって敬礼をしていた。通常はこの世界の人々に気づかれない様に普通の服装なのだが、これから向かう場所は人里離れた山中である為、機能的に優れた制服での出勤だった。制服のベルトには短剣が一つだけ取り付けられていた。

「龍輔さま、その短剣を引き抜いてくださいますか」

美奈萌に言われて龍輔は短剣を引き抜いた。20センチ程の鞘から短剣が……いや、そこから出てきたのは、1メートルもある程の剣だった。しかも握っていた柄も倍になっている。刃の部分は緩やかに反り、非常に日本刀に似ていた。柄と刃の境目には、引き金のような物が付いていた。

「そのトリガーを引くと、レーザーが発せられます」

と、龍輔の剣を取りレーザーの射出口である部分を見せた。

「この剣は、リユウさま……いえ、龍輔さましか使う事が出来ません。レーザーの発射も龍輔さまの意思がなければ発射いたしません。また、剣を水平に構えて……」

美奈萌は柄を掴みボタンを押した。すると、柄が半分に割れてグリップとスコープが現れた。

「これで、長距離用のライフルになります」

美奈萌は剣を元に戻し、龍輔に手渡した。龍輔は剣を受け取り、切っ先を鞘に近づけると、剣は短い鞘に吸い込まれるように収まった。それと右のブーツの足首にレーザーガンが格納されています。武器の説明は以上ですが、ご質問は御座いませんか？」

「あ、はい」

武器など手にした事がない……いや、手にした記憶がないというべきか、そんな龍輔は、ただ驚くばかりであった。

「それでは、これから現地向かう。くれぐれもこの世界の人々を

巻き込まない様に十分注意してくれ」

指揮官のクロガの言葉に戦士達は返事と共に敬礼をした。戦士たちが乗り込んだワゴン車に、美奈萌と龍輔も乗り込んだ。

？

想起（そうき）

想起そうき

一定の間隔で鳴る電子音が、南美の頭の中で響いていた。意識が覚醒し始めると共に、激しい頭痛に南美の顔が歪み、目を開いた。見慣れない白い天井と白い壁、その部屋のベッドに南美は横になっていた。身体を起こそうとしたが上半身に電気が走ったような痛みで動く事が出来なかった。

（ここは、どこ？なぜ、ここに？）

南美は記憶を探った。

（誰かがわたしを突き飛ばして…爆発が…龍輔さんが巻き込まれて…！龍輔さんは？）

南美の瞳から涙が溢れる。今すぐ龍輔を探しに行きたい衝動も、痛み支配された身体は動く事を拒んでいた。

ドアがノックされ、白衣を着た女性が入ってきた。

「気がつかれましたか？お身体の痛みは如何ですか？」

と、南美の涙を優しく拭きながら訊ねた。

「ここは、何処でしょうか？龍輔さんは大丈夫なのですか？何処にいるのですか？」

南美の質問の答えを持ち合わせていない白衣の女性は、困ったように謝り頭を下げ、

「暫くは、気持ちを落ち着かせてゆっくりお休みください。御用のある時はこのボタンを押してください」

と、南美の左腕にボタンのついた腕時計のようなものを巻きつけると、一礼して部屋を出て行った。薬の所為なのか再び南美の意識は薄れ、眠りに落ちた。

ミレニアル王国 玉座の間

国王のガルドラ・ミレニアル・ファルクスと王妃のクラリエルの前に5名の戦士たちが報告を行っていた。司令官のクロガ・カルシエル、その隣にミナモ・ルークヴェルク、二人の後ろに3名の戦士が跪いていた。

「それでは、リュウの行方はまだ、判らないのだな？」

国王ガルドラは苦渋に満ちた表情でクロガに訊ねた。

「誠に申し訳ありません、私がいながら王子を守ることが出来ませんでした。現在も数名の者に搜索を行わせておりますが、まだ連絡は入っておりません。これから我々も搜索に向かいます」

クロガは頭を下げたまま答えた。握られた拳は僅かに震えている。

王妃クラリエルは、俯いたまま唇をかみしめていた。

「そうか…それより、ミナモ、そなたは怪我をしているのではないのか？無理をしてはいかん、気持ちにはわかるが今は身体を治す事が先決だ。そなたの父君も心配しておったぞ」

国王の優しさに、堪えていた涙が頬をつたう。

「有難うございます、王子は必ず探し出します」

震えた声でミナモは涙を拭い、深々と頭を下げた。

「そなたたちと一緒に、この世界に来てしまった者はその後どうなのだ？」

国王の問いにクロガが答えた。

「彼女は治療を受け、今は眠っているようです。検査を行いました。が、異常は見られないとのことですよ」

彼女とは南美の事であった。龍輔と一緒にいた所を、何者かに襲われ押し込まれたトラックの中にいたのが此処にいる5名の戦士だった。爆風に飛ばされる中、咄嗟にクロガが転送装置を起動させ、こちらの世界に飛んだのだった。そこに南美も巻き込まれ一緒に飛んでしまっていた。その際に、南美とミナモは怪我を負ってしまったのだ。ミナモは南美の後ろにいたおかげで、左腕を負傷しただけであった。

玉座の間から戻ったミナモは、南美のベッドの横に座って、静かに眠る南美の横顔を見つめていた。

（この世界の方ではないのに、初めて会った気がしないのは…なぜ？）

ミナモは南美の手を握りしめた。知らぬ間に流れた涙にミナモは愕いた。

（なぜ…）

南美の手が微かに動き、南美は目を開けた。ミナモと南美の視線が繋がる。繋がれた手から優しさを感じる。

（でも、どうしてこの人は泣いているのだろうか？）

涙で頬を濡らしたミナモがとても、いとおしく感じ、南美は微笑んだ。二人は何も言わず暫く見つめあった。

控えめなノックにミナモが答えると、ドアの向こうから声が聞こえた。

「ミナモさま、クロガ司令官が呼びです」

ミナモは立ち上がり、南美に微笑むと

「失礼ですが、あなたのお名前を聞かせていただだけませんか？」

ミナモの問いかけに

「わたしは、鈴元南美と申します」

頬笑みながら答えた。

「わたしは、ミナモ…ミナモ・ルークヴェルクと申します。後で一緒にお食事致しましょうね」

そう言うミナモは部屋を出て行った。

（ミナモ…さんって、いうんだ、優しそうなひとだな）

南美はなぜか、懐かしいような感情が湧きあがってくるのを感じた。突然、南美を激しい頭痛が襲う。意識が薄れていく中、ミナモの優しい笑顔が浮かび南美は気を失った。

二人分の食事が乗ったワゴンを押していたミナモが、南美の寝ている部屋のドアをノックした。しかし、返事がない。

（寝ているのかな？）

ミナモはドアを開け中に入りベッドを見た。彼女が寝ているはずのベッドには誰もいなかった。部屋を見回しても彼女の姿はどこにもない。

（まだ、動ける体ではないのに…）

ふと目に入った窓は、開け放たれ、カーテンが風に揺れている。ミナモは窓から外を見た。此处は建物の3階で、怪我をしている彼女が、降り事など出来るはずがない。ミナモは通信機で南美がいなくなった事をクログに告げると、部屋を飛び出した。彼女の看護をしていた者にも訊ねると、愕いた後に頭を下げ、ミナモに謝った。

「申し訳ありません」

ミナモは彼女の肩に手を置き、

「あなたの所為ではありませんよ。一緒に探して頂けますか」と、優しく微笑みかけた。

ミナモは建物の入り口にいる警備の者に訊ねた。

「3時間くらいの間に誰かが此处を出て行きませんでしたか？」

しかし、今日は誰も、出入りがないと警備の者は答えた。

「警備の者全てに連絡を取って確認をお願い致します」

その者は短い返事で答えると、携帯していた通信機で連絡を取り始めた。

ふらつく足を引きずりながら山道を南美は歩いていた。

ベッドの上で、ここにはいけないと胸騒ぎがした南美は、激しい頭痛に気を失い、気が付くと彼女は山の中にいた。振り返ると、南美がいた建物が木々の間から小さく見えた。どのようにしてここまで来たのか全く判らなかった。此处が何処なのかも判らないはずなのに、南美の足は迷うこともなく進んでいた。しかし、再び激痛が南美を襲い、意識を失った身体は崩れ落ちた。

爆発に巻き込まれた龍輔が吹き飛ばされながら叫んでいた。

「南美…」

「南美、南美」

何度も聞こえる龍輔の声…

「…！？」

目を開けた南美を男が覗きこんでいた。

「りゅうすけ…さん？龍輔さんなの？」

急速に回復した視界に入ってきたのは龍輔の顔だった。

「南美、大丈夫か？」

心配そうな顔の龍輔に南美は抱きついた。

「龍輔さん…無事だった…のね…」

南美の涙で龍輔の肩は濡れていた。龍輔は南美の肩を掴んで顔を向き合わせる、南美の涙を拭って…優しく唇を重ねた。

龍輔は南美を背負うと、南美の言う通りに歩き出した。龍輔の背中で南美は激しい頭痛に襲われていた。龍輔に気づかれない様に声押し殺し痛みに耐えていたが、いつの間にか気を失っていた。

南美は、ベッドの上で目を覚ました。目の前にはひとりの女性が南美を覗きこんでいた。

「ミナミリア…よかった、何処かいたいところはない？」

と、訊ねるととても綺麗な女性に見覚えは無かった。しかし、南美の口から出た一言は…

「…おかあさま…」

（えっ…?!）

南美は自分の口から出た言葉に愕いた。

「ミナミリア…無事だったのね。本当によかった」

南美の手を握りしめその女性は涙を流していた。

（ミナミリアって…わたしのこと？この女性は、私のおかあさん？）
「ミレニアル王国の者に連れ去られる所を我が兵士が見つけたのですよ。あなたが向こうの世界に行って、連絡が取れなくなってから

心配していたのですよ。…でも、無事でよかった」

混乱する南美の手を握ったまま、その女性は涙を流していた。

（ミレニアル王国…？）

ますます混乱する南美であつたが、何かが気になっていた。

（何かを忘れているような…それは、とても大事な事？）

「何も考えず、もう少しお休みなさい」

考え込む南美を横たわらせ、女性の優しい声に南美は目を閉じた。

何も見えない暗闇の中に南美はいた。何処からか声が聞こえる。

（…ミナミ…ミナミ…）

「だれ？…私を呼ぶのは誰…？」

その時、目の前が明るくなり、炎に包まれるひとりの男。彼女は手を伸ばし、叫ぶ…しかし、声が出ない。炎が男を飲み込む…涙で叫ぶ彼女…やはり声は出ない…

「いやあああ…」

叫びながらベッドで上半身を起こし、目を覚ます…？！

窓から差し込む光で暖められた部屋は、見慣れた自分の寝室だった。

（…ゆめ？…あの男の人は…だれ？）

突然部屋のドアがノックされる。

「ミナミリアさま、お目覚めですか？」

聞きなれた、侍女のメイヤの声だ。

ミナミリアは朝食を済ませて、紅茶を飲んでいた。

ずっと何かが、頭の片隅に残っている。それが何なのか、いくら考えても思い出せない。

「紅茶は如何ですか？」

メイヤが訊ねた。彼女はミナミリアの侍女なのだが、年が同じという事もありミナミリアは友達のように接していた。

「ミナミリアさま？何かお悩みごとでもおありですか？」

紅茶をミナミリアのカップに注ぎながらメイヤが訊ねた。

「あのねメイヤ、わたし何か大事な事を忘れているような気がするのだけれど…思い出せないの」

窓の外の青い空を見ながら目を細めた。

「そうですか、思い出されるといいですね」

メイヤは優しく微笑んだ。

「ミナミリアさま、大公さまがお呼びになられておりますので、そろそろご準備なさいませんか？」

メイヤの問いかけに素直に答え、立ち上がった。

メイヤと共に城内を歩くミナミリアが、ふと足を止めた。

「ミナミリアさま、どうかありませんか？」

メイヤの問いかけにも答えず、考え込むミナミリア。

「ミナミリアさま？」

メイヤが訊ねると同時に、振り返り走り出すミナミリア。

「ミナミリアさま、お待ちください、どちらに行かれるのですか？」

…しかし、ミナミリアは振り返らず走り続けた。

(…呼んでいる…私を…でも、だれなの?)

心の赴くままに走り、階段を駆け下り、薄暗い廊下のひとつの扉の前で彼女の足が止まった。そして、躊躇うことなく扉を開く。目の前に伸びる廊下の先に二人の兵士がこちらに気づき、近寄ってくる。

「ミ、ミナミリアさま！」

彼女に気付いた兵士は、彼女の前で跪く。下を向いたままの兵士が口を開く。

「ミナミリアさま、ここにどのような御用でありましょうか？」

兵士の問いには答えず、そのまま先に進むミナミリア。

二人の兵士は、跪いたまま動かない。その時、扉が開く。ミナミリアを追ってきたメイヤだった。

「ミナミリアさま、お待ちください、ここは…」

ミナミリアの腕をやりわりと掴み彼女の顔を見たメイヤは言葉を止めた。ミナミリアは、泣いていた。声も出さずに、彼女の頬を涙が

つたっていた。驚くばかりのメイヤの手を優しく振りほどくと、また彼女は歩き出し、鉄格子の扉を開けた。その音に我に返ったメイヤが後を追う。

通路の両側には鉄の扉がいくつも並んでいた、ミナミアは迷うことなくひとつの扉の前で止まると、扉の小さな覗き窓を覗く。部屋の中で一人の男が小さなベッドに横たわっていた。ミナミアの口元が微かに開き、吐息のような細かい声が漏れる。

「りゅうすけさん…」

彼女の後ろに近づいたメイヤが声を掛けようとした時、

「メイヤ、この扉を開けなさい」

メイヤは、頬を濡らしそう言うミナミアに、何も言う事が出来なかった。ミナミアは通路で跪いている兵士に向かって言った。

「この者をここから出しなさい」

兵士たちは愕きミナミアの前に再び跪き

「恐れながらこの者は、ミナミアさまを連れ去ろうとした、ミレニアル王国の者であります。いかに、姫様のご命令であっても…」

「違います!」

ミナミアが兵士の言葉を遮るように言った。

「この者は、ミレニアル王国の者ではありません。私を助けここまで連れて頂いた方です。丁重にもてなさなければならぬ方を、牢に閉じ込めるとは何事ですか!今すぐここを開けなさい。父上には私から直接お話しいたします」

厳しい口調の彼女に兵士たちは、あわてて、扉の鍵を開けた。

ミナミアは、扉を開け中に入って行った。メイヤはただ驚き、茫然と立ち尽くしていた。扉の開く音に顔をあげた男は、目を細めミナミアの顔を見上げた。

「…南美…さん?」

ミナミアは彼に駆け寄り、手を握った。

「よかった、無事だったのですね…うつ…南美さん…」

彼は何かを言おうとしたが彼の意識は途切れてしまった。

「りゅうすけさん」

ミナミリアの叫びが響いた。

幸いにも彼は、気を失っただけだった。医学の知識も持っているメイヤが検査をし、問題のない事を伝えた。「ミナミリアさま、この方は…」

メイヤの言葉をミナミリアは人差し指を口元にたて止めた。

「これからこの方をこの方の世界に返します。この事は誰にも言うてはいけません、いいですね」

ミナミリアの言葉に愕いたが、彼女の涙を思い返したメイヤは黙って頷いた。

キヤスター付きのベッドに乗せた彼を『転送室』という部屋に運び込んだミナミリアとメイヤは、彼をベッドのまま転送機の上に乗せ装置を起動させた。

彼の身体は、音もなく消え去った。ベッドだけを残して…

「これから、私もあちらの世界に向かいます。父上と母上には、あちらの世界の調査にでも行つたと、うまくごまかしてくださいね」と、ウインクして微笑むミナミリア。メイヤは頬笑み、頷く。

ミナミリアが転送機の上に立ち、メイヤが起動の準備をしていた。突然ドアが開き、数人の兵士が入ってきた。その後ろから現れたのは、大公のドラグエルだった。

「父上！」

愕てるミナミリアにドラグエルが言った。

「ミナミリア！そなたは、何をしているのだ。そなたが連れ出した者はどうしたのだ？いくらお前でも勝手な事は許さん」

「父上、あの方は…」

ミナミリアの言葉を遮り

「口答えは許さん、ミナミリアを連れてこい」

と、部屋を出ていく。ドラグエルに命令された兵士は、ミナミリア

の前で跪き一礼すると、ミナミアを扉の方へと促す。ミナミアは素直に従い、部屋を後にした。

龍輔の無事を祈りながら…

？

夢と現実の境界線

夢と現実の境界線

龍輔がよく行っていたバーのカウンターで、泣きながら酔っていた女性、それが南美だった。二人は会話を交わしてから、急速に惹かれあい付き合い始めた。ある日二人でいるところを何者かに襲われ、さらわれた南美を助けた時に爆発に巻き込まれ、気がつくとも慣れない山中にいた龍輔。当てもなく歩いていると、道端に一人の女性が倒れていた。それは、南美だった。怪我をしていた南美は龍輔の背中で気を失う。南美を背負ったまま山を降り歩き続けた。

前方から一台の車がやってくるのが見えた。近づく車を見て龍輔は愕いた。その車には、タイヤがなかった。地上から僅かに浮いているのだ。やがて、その車(?)は龍輔の前で止まり軍服のような服装の男が二人降りてきた。

「ここで何をしているのだ？」

事務的で威圧的に一人の男が言い放つ。もう一人の男は後ろに廻った。背中の南美の顔を覗いている。

「この女性が怪我をしているのです。手当をお願いしたいのですが……」

龍輔の訴えに車(?)の後ろのドアを開け、

「ここに乗せろ」

と、相変わらず威圧的な言い方だ。

龍輔は言われたとおり南美を後ろのシートに横たえた。すると、一人の男は愕き、銃らしきものを龍輔に向けた。「貴様、何者だ！」そして、もう一人の男が龍輔を後ろ手に何かで、拘束した。

「何をするんだ！」

龍輔は抵抗しようとしたが、何かを身体に打ち込まれ気を失う。

白い壁に囲まれた部屋の、ベッドの上で目を覚ます龍輔。部屋に広さは6畳ほどであろうか、ベッドから起き上がると部屋を見回した。

「南美！」

しかし、部屋には龍輔だけで、家具らしきものもベッドが一つあるだけで天井には照明すら付いていない。壁には窓はひとつもなく、鉄のドアが1枚あるだけだった。ドアに開閉の為のノブは無く、龍輔は近づいてドアを押してみたがびくともしない。龍輔はドアを何度か叩いた…しかし、ドアは音もたたないほど頑丈だった。

どのくらいの時間が経ったのか…いや、何日だったのかすら龍輔には判らなかった。食事を取っていない龍輔の身体は衰弱していてベッドから起きる事すら出来ないほどだった。突然、ドアが開く！龍輔がやつとのことで目を開くと、一人の女性が立っていた。

「…南美…さん？」

南美は彼に駆け寄り、手を握った。

「よかった、無事だったのですね…うつ…南美さん…」
龍輔の意識は途切れてしまった。

龍輔は目を覚めました。見慣れた天井、見慣れた部屋、そこは、龍輔の部屋だった。

「…！？」

龍輔は、暫くの間状況が掴めずにいた。

（…夢…だったのか？…）

正に現実と夢の境が、判らない状態になっていた。龍輔は、ふと携帯電話の着信履歴を見た。『鈴元南美』の名前を発見し、携帯電話の発信ボタンを押した。

「…おかけになった電話番号は、現在通話の出来ないところに…」
電話は繋がらなかった。でも、『鈴元南美』という名前が存在した事に龍輔は安心した。しかし…何処までが現実で、何処からが夢なのかはつきりしない。昨日までの記憶がかなり曖昧になっていた。

それから何度となく南美の携帯電話に掛けたが、繋がる事は無かった。

そして、数日が過ぎても、南美との連絡は取れなかった。

夕暮れ時の街で、龍輔は人の間を縫うように走っていた。

急ぐ余り、色を変えそうな信号に視線を奪われ、しかも歩道から斜めに横断歩道へと向かった龍輔の足は、歩道の縁石に払われ龍輔の体は宙を舞った。

そのまま横断歩道をこちらに向かって歩いてきた女性にぶつかり、からみあつて倒れこんだ。

…そして龍輔は、寿々城美奈萌と出会うことになる。

再会／敵対

再会／敵対

寢室の扉がノックされ、龍輔が返事をする、薄いピンクのニット素材のカーディガンに、黒のフレアスカートの美奈萌がドアから入ってきた。

「おはようございます、龍輔さま」

胸元の柔らかかなリボンが彼女をより可憐に見せていた。

「おはようございます、ミナモさん」

龍輔はベッドから降りて、ミナモに微笑む。

「昨日の疲れは御座いませんか？」

ミナモが訊ねる。

昨日は、ミナモと数人の戦士と共に、ウインガル公国の兵士達が潜んでいた場所へ乗り込んだ。しかし、建物の中には誰もいなかった。その付近を搜索したが、何も発見する事は出来なかった。

「ミナモさんこそお疲れになつてはいませんか？」

「わたしは大丈夫です、あ、朝食の用意が出来ていますのでいらしてください」

と、龍輔の問いかけに少し頬を染め、一礼すると部屋を出て行った。着替えを済ませ、リビングのソファに腰を下ろして煙草をくわえた。

突然テーブルのインターホンのランプが赤く光り、

「リュウさま、至急指令室までおいで下さい」

クロガ司令官の声がリビングに響いた。

制服に着替えた龍輔とミナモが指令室に入ると、すでに集まっていた戦士たちが敬礼で迎えた。

「リュウさま、ウインガル公国の者達を発見したとの報告が入りました」

クロガ司令官は、龍輔の事を『リュウさま』と呼んでいる。

「わかりました、直ちに現場に向かいます」

まだ、龍輔の記憶は戻っていないのだが、昨日もずっと呼ばれていた所為か差ほど違和感はなく会話をしていた。

龍輔達の部隊は工場の跡地に散開していた。司令官のクロガは、通信機から次々と入る情報をまとめ、的確な指示を伝えていた。

「クロガ司令！敵のアジトの入り口を発見致しました」

偵察していた戦士からの報告が入った。そのまま監視を続ける事をクロガが伝えると、龍輔を見て頷いた。

龍輔は、ミナモ、クロガ、数人の戦士たちと報告のあった場所に到着し、森の中で偵察をしていた戦士の報告を聞いた。目の前にある倉庫の入り口から数人が出入りしているのを確認した、とのことである。しかし今の場所から倉庫までは身を隠せる物が何もなかった。近づけばすぐに発見されてしまう。クロガと数人の戦士たちはこれからの作戦を話し合っていた。

すると、上空から微かに音が聞こえた。龍輔は空を見上げると黒い点を発見した。隣にいたミナモが龍輔に双眼鏡を差し出した。龍輔はそれを受け取り、空を見た。黒い点は、ヘリコプターだった。近づくにつれエンジン音が大きくなり爆音と共に、倉庫の前にそれは着陸した。数十名は乗れるのではないかという大型のヘリだった。ヘリのドアが開き、中から階段が現れ、黒いスーツ姿にサングラスを掛けた男が二人降りてきた。一人はヘリのドアの前に待機し辺りを警戒していた。もう一人は倉庫の扉の前で立ち止まると、左腕を口元に近づけ何かを話していた。通信機のような物が手首にあるようだ。暫くすると、倉庫の扉が開いて黒い軍服のような服を着た二人の男が現れドアの左右に分かれると向かい合って頭を下げた。その間から白い軍服に身を包んだ者が現れる。

「リュウさま、あの女性がウインガル公国の姫、ミナミリアです」
振り返ると、いつの間にか龍輔の後ろに双眼鏡をのぞくクロガがい

た。龍輔は再び双眼鏡をのぞき、その顔を確認した。

「！？…みなみ…」

驚きのあまり声を漏らす龍輔。彼の眼に映ったのはウインガル公国の姫、ミナミアではなく、鈴元南美だった。

（どうしてこんなところに…）

ミナモその顔に覚えがあるらしく、驚いた顔で言葉を失っていた。

「あの者たちを捕えるのだ、必ず生きたまま捕えるのだぞ」

戦士たちは無言のまま頷き、戦闘態勢に入った。

「狙撃班以外は、正面から突っ込む、続けえ！」

クロガと数名の戦士が勢いよく森を抜けだす。それに気付いた敵の兵士が銃を構えたが、狙撃班の攻撃に倒れた。慌てて、龍輔とミナモが走り出す。ヘリから数人の兵士が飛び出してくる。スーツの二人の男に護られたウインガル公国の姫は、ヘリに向かっている。龍輔は敵味方をすり抜けながら、ヘリに向かう。そしてそれを援護するミナモ。「みなみー！」

龍輔は剣を抜き、叫びながらヘリに近づく。姫を護っていた二人が狙撃され倒れる。向かい合う龍輔とミナミア。

「みなみ…」

近づこうとした瞬間、ミナミアが剣を構える。

「みなみ！？」

愕きのあまりに立ちすくむ龍輔に、ミナミアの剣が振り下ろされる。

「！？」

ミナモの剣がそれを受け止める。

「リュウさま、お下がってください」

ミナモの声も届かず立ち竦む龍輔。

「お前がミレニアルのリュウか、これ以上の邪魔は許さん」

そこにいたのは龍輔が知る南美ではなかった。必死でミナミアの攻撃を受けるミナモだが防ぐだけで精一杯だった。ミナミアの蹴りがミナモの腹部に入り、後ろに倒れる。ミナミアの剣は龍輔に

向かった。辛うじて剣で受け止める龍輔。目の前にミナミアの顔が近づく。

「みなみ、俺だ！龍輔だ！」

「何を言っておる、貴様など知らん」

ミナミアは剣を押しつけ後ろに飛んだ。その後ろから敵の兵士が龍輔に襲いかかる。身体が覚えているのか龍輔は華麗な剣さばきで敵を倒す。

「リュウ王子、覚悟！」

剣を横から振り払うミナミア…しかし、何かがその剣を受け止めた。

「ミナモさん…！」

剣を縦に受けたミナモだったが、受け切れずにミナミアの剣はミナモの脇腹に食い込んでいた。剣を引き抜き下がるミナミア。ミナモの脇腹が赤く染まり片膝をつくミナモ。

「うつ…」

しかし、剣はミナミアに真つすぐ伸びている。そこへ現れた敵の兵士がミナミアの前に立ち、

「ミナミアさま、へりにお乗りください」

と、ミナモの剣をけん制する。兵士の言葉にへりに乗り込むミナミア。龍輔がミナモの前に出て剣を構える。その兵士がミナモを見て驚く。

「ミナモさま…」

へりに乗り込むとしたミナミアが振り返る。龍輔が兵士に剣を振り下ろすと、兵士は後ろに飛び、へりの入口にいたミナミアを中に入れると、ドアを閉めた。

龍輔は振り返りミナモに駆け寄った。

「ミナモさん…誰か！ミナモさんの手当を…」

その声をかき消すように、爆音とともに舞い上がるへり。

へりの中のミナミアは、一人の兵士に訊ねた。

「カムロイ隊長、そなたはリュウ王子のそばにいた女性を知っているのか？」

「いえ、人違いかと…」

ミナミリアの問いかけに頭を下げたまま答える。

「そなたは、あの者の名前を呼んだのではないか？何を知っておる、話せ！」

カムロイは静かに頭を上げ答えた。

「…ミナミリアさまのお姉さまである、ミナモさまに…」

再び頭を下げ、言葉を詰まらせた。ミナミリアは椅子から立ち上がり、窓から下を見下ろした。横になって動かないミナモとそばに寄り添うリュウ王子が見えた。

「なぜだ…なぜ、姉上がリュウ王子のそばにいるのだ！」

兵士の襟を掴んで訊ねるミナミリア。

「すぐにへりを降ろせ、姉上を助けるのだ！」

涙ながらに訴えるミナミリア。

「申し訳ありません、これ以上姫様を危険な目には…」

俯きながら答える兵士に泣き崩れるミナミリアであった。

「倉庫の中には数人の兵士がいましたが、すべて取り押さえました。また、兵器を製造するための設備があり、この世界の人々が囚われておりましたが、ここでの記憶を消し解放いたしました」

「そうか、ご苦労だった」

兵士の報告にクロガ司令が答えた。

「ところで、ミナモさまの容態はどうなのだ？」

「傷が深く、出血も多いとのことですが、リュウさまが輸血に協力して頂き、只今治療中でございます」

そう答えると敬礼をして指令室を出ていった。

龍輔は輸血を終わり、手術室の前の廊下の椅子に腰かけていた。目を閉じると浮かんでくるのは、変わり果てた南美の姿だった。

（なぜ、南美さんは…全く俺を覚えていなかった…いったい何があ

ったのだ…それに、あの敵の兵士が、ミナモさんの名前を呼んだのはなぜだ?…」

手術室のドアが開き、ストレッチャーに乗せられたミナモが出てきた。

「ミナモさんは、どうなのですか?」

「暫くは安静にしなければなりません、大丈夫です、リュウさまの輸血のおかげで手術は成功いたしました」

微笑みながら医療班の主任が答えた。

「有難うございました」

龍輔は頭を下げた。

過去からの決別

過去からの決別

「リュウさま、本当に宜しいんですね？」

「はい、お願いします」

記憶定着装置の椅子に座った龍輔は答えた。二つの世界を繋いでいた、転送装置が技術者によって修理され、龍輔達はミレニアル王国へと戻っていた。失くした記憶を取り戻し、過去の記憶を消すことを決めた龍輔であった。龍輔の記憶を失くした南美……いや、ウィンガル公国の姫、ミナミアとは、再び戦わなければならない立場の龍輔には、とても辛い決断だった。出来る事なら王子の地位を放り投げて、南美のもとに向かいたい……しかし、南美の記憶を持ったままでは、自分を護ろうとしたミナモのように周りの者に迷惑がかかる事が龍輔には許せなかった。

「それではリュウさま、始めます」

その言葉に目を閉じた途端に、龍輔の意識は途切れた。

「ミナモ！動きが遅い！もう一度いくぞ！」

「はい！リュウさま、よろしくお願い致します」

リュウとミナモは再び剣を交える。リュウの烈火のごとく振り下ろされる剣を必死で防ぐミナモ。二人の動きに、同席していた戦士たちは、言葉を失い、息をのんで見ていた。ミナモの剣を打ち払い、剣は弧を描きミナモの手を離れた。

「まいりました、リュウさま」

ミナモはリュウの足元で正座をし、頭を下げた。

「ミナモ、まだまだ修行が足りないぞ！」

厳しく言い放つリュウに、ミナモはさらに頭を下げた。

「申し訳ありません、有難うございました」

戦士の中でも一番の剣さばきのミナモでさえ、リュウにはまだまだかなわなかった。

「ウインガル公国の野望を打ち砕くためにも、しっかりと鍛錬せよ！」

リュウの言葉に戦士たちは言葉短く答え、敬礼をした。

「父上お呼びでしょうか」

リュウはミレニアル国王ガルドラ・ミレニアル・ファルクスの前で跪き、一礼をした。

「堅苦しい挨拶は良い、ここはファルクス家のプライベートスペースだ」

ガルドラは微笑みながらリュウの肩を抱きソファアに座らせ、向かい合って座った。

「それにしても本当によく無事に帰ってきてくれた」
そういうガルドラの瞳は潤んでいた。

「ところで、ミナモの事だが……」

「ミナモがどうかしましたか？」

龍輔が問いかけると同時に入口の扉がノックされた。ミレニアル王国の王妃クラリエル、リュウの母親が入ってきた。その後ろから白いドレスを纏った女性が現れた。

「……ミナモ?!」

先ほどまで剣を交えていたミナモとは別人のようなその姿に、リュウは愕きのあまり声を上げ、見惚れた。クラリエルはミナモの手を取り、リュウの隣に座らせた。

「あなたも無事に帰ってきた事だし、ミナモさんをいつまでも待たせてはいけませんよ」

クラリエルはミナモを見ながら言った。ミナモは俯いて頬を赤く染めていた。リュウはミナモの手を取った。ミナモはリュウを見つめる。

「ミナモ……すまない、今は大事な戦いの最中だ。この戦いが終わる

まで君との結婚は待つて欲しい」「はい」
リュウの優しい言葉に、ミナモの瞳は潤んでいた。

鮮やかなオレンジ色に輝く地平線、青い空がダークブルーに塗り替えられ…やがて消え去るオレンジの光。空が闇を纏い始め、ゆっくりと現れるいくつもの星の輝き。そして暗闇に抵抗するかのよう
に月が淡い光を放つ。

ミナモはリュウの腕に寄り添って星空を見ていた。

「ミナモ…もう傷の具合はいいのか？」

リュウは星空を見上げたまま訊ねた。

「はい、ご心配をおかけいたしましたですが、もう大丈夫です」

リュウはミナモに向き合い肩を掴んだ。

「ミナモ、すまなかった。俺がそばにいなからミナモを傷つけてしまった…これからは、お前の事は俺が命を掛けて護る！」

リュウに抱きしめられたミナモの頬を涙がつつたう。

「リュウさま、有難うございます。でも、リュウさまを護る事がわたくしの…」

ミナモを抱きしめるリュウの腕に力が入る。

「戦士としての使命などいいのだ。お前が傷つく事が俺には何よりも辛い」

そう言うミナモの髪をそつと撫で、肩を掴みミナモを見つめた。
リュウの顔がミナモに近づいてくる。

ミナモはそつと目を閉じる…ミナモの唇にリュウがそつと触れる。
リュウの優しさが、リュウの愛がミナモを包みこむ。

「愛しています…リュウ…」

ミナモの言葉にリュウの優しい唇が答えた。

ミレニアル王国の宮殿前に戦士たちは集まっていた。戦士たちの視線にリュウ王子が現れると一斉に敬礼をする。

「これから、我々はウインガル公国へと向かう。目的はウインガル

公国の転送施設を破壊し、大公ドラゲエルを肅清することにある。
熾烈な戦いになる事と思う。しかし、無謀な戦いはせぬように、誰
一人として命を落とす事は許さん！これは命令だ！よいか！！」
リュウ王子の言葉に戦士たちは一斉に答える。

昏迷の戦い

昏迷の戦い

ミナミリアは、レナリアの前で泣き崩れていた。

「母上、なぜ隠されていたのですか？全てを話してください。姉上はなぜにミレニアル王国にいたのですか…なぜ、私に言ってくれなかったのですか…わたしは、この手で姉上を…」

泣き叫ぶミナミリアにレナリアは何も答えず、俯き涙を堪えていた。侍女のメイヤに付き添われ、部屋に戻ったミナミリアは、ただひたすら、泣いた。メイヤも掛ける言葉を見つけれず、ミナミリアの背中をさすっている。メイヤはミナミリアが不憫で仕方なかった。ウインガル公国が侵略しようとしている世界で出会い、愛した男性との記憶を消され、実の姉の存在を知らされず、姉と戦い命を奪ってしまった。

（私が、ミナミリアさまに出来る事は何があるのだろう…）

何も出来ない自分が情けなかった。しかし、ミナミリアの背中を抱きしめる事しか出来なかった。

「憎い…あいつが憎い…あいつを庇って、姉上は…あいつを倒す、リュウ王子を…」

ミナミリアは涙を拭き立ち上がると、剣を取り部屋を飛び出した。

メイヤは、訓練室のガラス越しに無心に剣を振るうミナミリアを見つめていた。ミナミリアの姿が涙で滲む。そして、メイヤは心を決める。せめて、消された記憶をミナミリアに戻してあげようと…それで、少しはミナミリアも救われるはずだと…

しかし、それがさらにミナミリアを苦しめることになるとは、思いもしないメイヤだった。

少しだけ落ち着いたミナミリアはメイヤに連れられ、記憶定着装置に座っていた。

「メイヤ、いったい何を…」

不安な顔でメイヤを見るミナミリア。

「確認したい事がありますので、少しだけお付き合ってください。お手数をおかけして申し訳ありません」

メイヤが深々と頭を下げる。メイヤは操作室に入りこちらに向かつて微笑んでいる。メイヤの事を誰よりも信頼しているミナミリアは、メイヤに微笑み目を閉じた。
そして、ミナミリアの意識が遠のく。

薄暗いバーのカウンターでミナミリアは、目の前のグラスを見つめていた。

(…?!…なぜ、涙が出るの?…もう泣かないって決めたのに…)
グラスを握りしめ俯くミナミリアの左から手が伸び、白いハンカチが…ミナミリアが振り返ると、一人の男の背中が目に入った。

(まっって、あなたは誰?…)

追いかけてようとしたが身体が動かない…そして意識が途絶える。

気がつくとミナミリアは誰かに背負われていた。とても懐かしい香りが男の背中から漂う。とても大好きなその人の名前を呼ぼうとするが、何故か思い出せない。ミナミリアはしがみついていた腕に力を入れた…とたんにその人が消えてゆく…。

(どうして、私を置いて行くの…お願い…私を、たすけて…)

「ミナミリアさま、大丈夫ですか?」

ミナミリアが目を開けると、心配そうな顔で覗き込むメイヤ。

「ミナミリアさま、ご気分は如何ですか?」

「大丈夫よ、メイヤ」

ミナミリアは微笑みながら答えた。一筋の涙がミナミリアの頬をつたう。

「え?!…私、なぜ泣いているの?」

「ミナミリアさま、お部屋に戻って少し休みましょう」
メイヤが用意した車いすに移動して部屋へと向かった。

リュウ王子率いる戦士たちは、ウインガル公国を見下ろせる森の中にいた。この場所を司令の拠点にするらしく、戦士たちが音も立てずに見る間に仮設の指令室を組み建てていく。各隊の指揮官に指示をしていたクロガが近づいてくる。

「リュウさま、仮設の司令室の準備が出来次第、各隊の指揮官を集めての会議を行います。リュウさまは、今のうちにお食事をお取り下さい。ミナモさまも、リュウさまとご一緒にお食事をお取り下さい」 そう言いと、クロガは指令室の中に入って行った。

リュウとミナモが一つの小屋に入る。ドアを開けると中で食事をしていた戦士たちが立ち上がり敬礼をした。

「私に気づかいはいりません、食事を続けてください」

リュウは戦士達にそう言くと、ミナモと空いているテーブルに着いた。クロガは、リュウ専用の部屋を用意すると言ったのだが、リュウは戦士たちと同じ部屋で構わないとクロガに伝えていた。

食事を終えたリュウとミナモは用意された椅子に座り、コーヒーを飲んでいた。一人の戦士がリュウの前に跪き、

「リュウ王子、クロガ司令が呼びです。指令室までお越し下さいませ」

そう言つと一礼をして立ち去った。

「今回の戦いは、ウインガルの転送施設の破壊し、速やかに大公ドラグエルの拘束を目的とする。不用意な戦いは極力避け、隠密行動に徹せよ」

クロガ司令の細やかな指示が各隊の指揮官に伝えられる。

「リュウ王子、一言お願い頂けますか？」

クロガの言葉に、リュウが立ち上がる。

「今回の戦いにおいて、味方にも、敵にも出来る限り死者を出さぬ

ようお願いしたい。戦いの中で無理な事だとは判っています。しかし戦士一人一人にその思いを伝えて欲しいのです。もちろん、己の命を、そして、仲間の命を護る事が一番大事な事ではありますが、ウインガルの兵士達に、憎しみを持って戦うのではなく、同じ人間として接して頂きたい。この戦いで全てを終わらせたいのです」

リュウの言葉に、全ての指揮官が頷く。

「それでは、これより作戦を開始する。リュウ王子の思いを全ての戦士たちと共有して、作戦を成功させるのだ」

メイヤは、静かに寝息を立てるミナミアの顔をじっと見ていた。
(ミナミアさまの記憶は戻っていないのかしら?)

あまり変わった感じが見受けられなかったのが気に掛かっていたメイヤだった。

「あ、メイヤ…」

ミナミアが目覚めました。

「ミナミアさま、ご気分は如何ですか？頭痛とかはありませんか？」

心配そうにのぞき込むメイヤに笑顔で答える。

「うん、もうすっかり良くなりましたよ、ありがとう、メイヤ」

突然、ドアがノックされる。

「どなたですか？」

メイヤがドアに近づくと、

「ミナミアさま、ミレニアル王国の者達が攻めてまいりました。

お急ぎでご準備をお願いします」 兵士の言葉に、ミナミアの

顔から笑顔が消え、戦士の顔になる。

作戦開始から1時間程経った頃、リュウとミナモは二人の戦士と共にウインガルの宮殿に侵入していた。別行動を取ることを、クロガに反対されたのだが、リュウに押し切られ、クロガの選んだ戦士を同行させることで、納得させた。

すでに、ウインガルの通信施設は制圧されており、かなりの者が宮殿内部で戦闘を開始していた。リュウの目的は、大公ドラグエルの拘束であった。不用意な戦いを避ける為にも、大公さえ拘束できれば戦局は一気に終息に向かう。

長い廊下を警戒しながら進む。先行して警戒していた戦士が、誰かがこちらに向かっている事をリュウに伝える。

「リュウさまとミナモさまは、お下がりでください」

廊下の角から現れたのは…ミナミリアだった。

「姉上！」

愕いたミナミリアが呟く。

そばにいたウインガルの兵士がミナミリアの前に立ちはだかり、リュウと同行していた戦士に襲いかかる。

もう一人の戦士が、ミナミリアに向かおうとした時、リュウがそれを制止した。

剣を抜きリュウが前に出る。

「ウインガルの姫さまですね。私は無益な戦いは避けたい。ここを通しては…」

リュウの言葉を遮りミナミリアは剣を構えた。

「ばかな、わたしは、ウインガル公国、大公ドラグエルの娘、ミナミリアである。リュウ王子、そなたを通すわけにはいかぬ」

ミナミリアは剣を振り下ろす。騒ぎを聞きつけ、ウインガルの兵士達が駆け付ける。

「リュウさま、ここは私どもにお任せ下さい。リュウさまは先にお進みください」

リュウはミナミリアの剣をはねのける。ミナミリアは後ろに下がる。駆け付けた兵士がミナミリアの後ろから襲いかかる。リュウを守るべく戦士がその剣を受ける。

「リュウさま、お急ぎください」

二人の戦士は、クロガが推薦しただけの事であり、剣の腕は見事なものだった。しかし相手の兵士の数は増えていた。

リュウは唇をかみしめ

「わかった、すまぬがここは任せる」

戦士は笑顔で答える。リュウは、ミナモを伴い走り出す。それに気付いたウインガルの兵士が追いかけようとするが、二人の戦士がそれを阻止する。ミナミリアも兵士を伴い、その場を離れる。

宮殿の見取り図は、事前に目を通していたリュウだった。大公の居場所は目星をつけていた。途中、何人かの兵士に遭遇したが、剣は使わず威力を抑えたレーザーで気絶させた。ミナモは剣の腕も中々だが、狙撃にも優れていた、狙撃だけで言えば、リュウより上かもしれない。

リュウ達は、目的の部屋に近づいていた。

「ミナモ、正面からの突破は無理だ。空調のダクトから侵入するぞ」リュウに続いてミナモは、ダクトに入った。ダクト内部は高さがあり、中腰で進む事が出来た。ダクトの吹き出し口らしいスリットから灯りが漏れている。リュウとミナモはスリットから中の様子を窺う。そこには、大公ドラグエルがいた。重厚な鎧を身に纏った兵士が5名大公を護っていた。

「ミナモは此処で待機だ。俺が中に飛び込んだら援護を頼む」

無言で頷くミナモ。リュウは、ミナモをその場に残し、先に進んだ。リュウが覗くスリットからは、大公ドラグエルの後姿が見える。リュウは手首を口元に近づけ、通信機でミナモに合図を送った。スリットを蹴り飛ばし、部屋に侵入するリュウ。同時にミナモのレーザーが兵士を狙い撃つ。

「大公ドラグエル覚悟！」

リュウは剣を電撃モードに切り替え、ドラグエルに振り下ろす。一人の兵士がその剣を受け、跳ね跳ぶ。リュウの剣が、ドラグエルの喉元に突きつけられた。その時、扉が開き白い軍服を身に纏った兵士が、レーザーを発射する。リュウの右肩を貫通し、剣を落とし蹲るリュウ。リュウを撃ったのは、ミナミリアだった。ミナミリアは

ドラグエルの前に立ちリュウに剣を突き付ける。

「リュウ…！」

ミナモがダクトから飛び出しながら、レーザーを撃つ。ドラグエルが膝から崩れ落ちる。

「父上！」

ミナミリアは、叫びながらも剣はリュウに向けられたままだった。

ミナモは、ミナミリアに狙いをつけ、「動いたらあなたを撃ちます。剣を降ろしなさい」

ミナミリアはミナモに視線を向けながら呟く。

「姉上…どうして…」

その言葉を聞いたミナモが愕く。白く立ち込めた霧が晴れるように、ミナモの記憶がよみがえり、ミナミリアの顔が妹の顔と重なる。

「ミナミリア…あなたは…」

その時入口から飛び込んできたミレニアルの戦士が、レーザーを発射した。レーザーはミナミリアの剣を持つ手に当たりミナミリアは剣を落とす。ミナミリアは、壁に向かって走り出し壁に手をつく。壁が回転しミナミリアが消えた。

「リュウさま、大丈夫ですか」

ミナモはリュウに駆け寄り出血している肩の手当を始めた。

「大公ドラグエルは拘束いたしました。気絶しているだけで、怪我はありません。大公が拘束された事で、ウインガルの兵士達は投降し始めております。まだ数名の兵士が抵抗しておりますが、制圧するのは時間の問題かと…」

クロガの報告を聞いていたリュウは、クロガに訊ねた。

「ミナミリア姫の行方は、判りましたか？」

「それが、いまだ、行方が判りません。只今、搜索中でございます」「そうですか…」

リュウはミナモに訊ねた。

「ミナミリア姫があなたを姉上と呼んでいましたが…本当なのです」

か？」

ミナモは、リュウの問いかけに無言で頷いた。ミナモの瞳は涙で潤んでいた。

情愛

情愛

ウインガル公国はミレニアル王国の手によって制圧された。

リュウとミナモは、クロガと共にウインガル公国の転送施設にいた。至る所に爆弾をセットする作業が進んでいた。「ここを破壊すれば、他の世界を侵略する事はできなくなりますね。そうなれば、我が国の転送施設も必要ありませんね」リュウの言葉にクロガは頷く。「そろそろ、爆破の作業にはいりますので、我々もここから離れましょう」ミナモはリュウの肩を心配そうに見ている。

施設を離れ、爆破の秒読みが始まる。「爆破、20分前です」

ミナモの双眼鏡が施設の窓に釘付けになっていた。リュウは、ミナモの視線の先を双眼鏡で追った。「…!？」

白い人影が窓に映る。

「あれは…?!クロガ司令!爆破を中止して下さい!」リュウは叫んだ。

「リュウさま、20分を切っておりますので、ここからでは無理です。爆弾本体で解除作業を行わなければ解除できません。何があったのですか？」

「ミナミリア姫だ、彼女が建物の中にいる…ミナモ…?」

隣にいたはずのミナモがいない。すると、1台の車が施設に向かって走っていく。「まさか…ミナモ…?」リュウは傍に停まっていたバイクに跨り走り出す。

「リュウさま、お戻りください。別の者に向かわせます」

クロガが叫び、戦士に向かうように告げる。

「すぐに戻る、誰も中に入れるな」

リュウはそう言つと、施設に向かってバイクを走らせる。

建物の入り口前に車が止まり、ミナモが建物の中に入っていく。

「ミナモ！戻るんだ！」　しかしリュウの声は届かない。
リュウは、バイクのまま入口に飛び込む。

ガラスを突き破り、階段を駆け上がるミナモを追って、バイクを走らせる。

ミナモに追いつき、腕を掴むとバイクの後ろにミナモを乗せて、走り出す。

廊下の先に白い人影が…ミナミリアだ。リュウがバイクを止め、叫ぶ。

「ミナミリア姫！ここは間もなく爆破される。急いで外に出るんだ！」

ミナミリアはそれに答えず、こちらに向かってくる…剣を構えて…。

走り出したミナミリアは跳躍し剣を振り下ろす。

咄嗟に剣を抜きそれを受け止めるリュウ。

負傷している肩から血が滲み、リュウの顔が苦痛に歪み、剣を落とす。

さらに腰の位置で剣を水平に構え、向かってくるミナミリア。

ミナミリアの剣は、リュウの身体を…貫いたはずだった。

しかし、ミナミリアの剣は何かを受け止められた。

「ミナミリア…大きくなって、素敵になって、気がつかなくて…ごめんね…」

微笑んだミナモが、ミナミリアの目の前にいる。

ミナミリアの剣を受け止めて…。

「姉上…！どうして…あねうえ！」

ミナミリアは泣き崩れる。

「ミナモ…！？」　リュウがミナモに駆け寄る。

「リュウさま、ご無事ですか？」

「俺は、大丈夫だ、しっかりするんだ、ミナモ」

「よかった…でも、またリュウさまに怒られますね…」

「しゃべるんじゃない、ミナモ、必ず助けるから、頑張るんだぞ」

「ミナミアを…助けて…ください…」

泣き崩れていた、ミナミアは立ち上がり、

「リュウ王子、姉上を助けてください…」と、少女のように泣きじゃくっている。

「ミナモも、ミナミア姫も、必ず助ける。さあ、急いでここから出よう」

リュウはミナモを背負い、バイクに跨った。

「さあ、ミナミア姫あなたも…」

「…!？」

しかしそこには、ミナミアはいなかった。

「必ず、姉上を助けてください」廊下を走りながらミナミアが叫ぶ。

「ミナミア! 戻ってくるんだ!」

リュウが叫ぶも、すでに、ミナミアの姿はどこにもなかった。

リュウが建物を出ると、リュウを追ってきた戦士がいた。

「爆発まで、後何分だ？」

「あと、5分です」

「ミナモを頼む」

リュウは、ミナモを戦士に託すと、バイクで再び建物の中に入って行った。

「ミナミア! どこだ、何処にいるんだ」

リュウは、声の限りに叫んだ。

そして、転送装置の前に佇むミナミアを見つけた。

「ミナミア!」

「リュウ王子、どうして…」

「ミナモは仲間が運んだ。さあ、一緒にここを出よう」

「わたしは、二度も姉上を刺してしまった。姉上にとって、あなたは大切な人だったのですね」

「ミナモにとつて、ミナミア、あなたも大切な妹だ。さあ、ここから出よう」

「…わかりました。こちらが近道です」

ミナミアは扉をあけて、リュウを促した。そして、リュウが入ると扉を閉めた。

「！？…ミナミアどういうことだ」

「この中なら、きっと爆発にも耐えられると思います。姉上の大切な人を護りたいから…」

リュウは扉を叩いたが、びくとしなかった。

「ミナミア！開けるんだ！ミナミア！」

ミナミアは部屋のベッドに横たわり目を閉じた。

「さようなら、リュウ…、…！？…リュウ…りゅうすけ…さん?!」

ミナミアは、目を開けリュウを見た…

そして、部屋は爆音とともに炎に包まれ…全てを焼き尽くす…

秘められた心情

秘められた心情

リュウは、自室のベランダに置かれていた椅子に座って、外を見ていた。しかし、その視線は…何も捉えていなかった。動かないリュウの髪を、風が優しく揺らしている。

ウインガル公国を攻め落とし、各施設を破壊した日から、5日が過ぎていた。爆破された施設からリュウは無事に発見された。リュウの居た部屋が地下1階であった為、発見までには2日を要した。しかし、強固な壁に囲まれた部屋にいたリュウは、意識こそなくしてはいたが、命に別状は無かった。それから2日間リュウは眠り続け、昨日意識を取り戻した。そして、もう一人リュウと一緒に発見された女性がいた。ウインガルの者なのだろうが、兵士ではなかった。服装からすると、宮殿で働いていた者ではないかとの事だった。彼女に外傷は無いのだが、意識を失っており、いまだ眠り続けていた。ミナモは現在も意識不明の重体で、また、ミナミア姫においては、爆破された施設からは発見されなかったとのことだった。リュウはミナモを護れなかった事を攻め続けていた。そして、ミナミア姫を…いや、南美を助ける事が出来なかった事も…。

爆発のショックの所為なのか、リュウは消したはずの記憶が蘇っていた。

ドアがノックされた。「リュウさま、クログで御座います。ミナモさまが意識を取り戻されました。急いでいらして頂けますか」その声に我に返ったリュウは立ち上がり、部屋を飛び出た。

「リュウ…ウさま…ご無事だったのですね…よかった…」ミナモが涙を流して、か細い声で言った。「ミナモ、お前が護ってくれたおかげだ、有難う。しかし…」ミナモの手を握るリュウの手に力

が入る。 「すまない…ミナミア姫を助ける事が出来なかった…」
リュウは涙を堪え、俯く。そして、自分を助けてくれた事も伝え
た。

「そう…ですか…わたしのリュウを…護ってくれた…のですね」
ミナモの涙をリュウは拭い、そっと、くちづけをした。ミナモは痛
みと苦しみを堪え、精一杯の笑顔を見せた。 「ゆっくり休んで、
早く治すのだぞ。ミナモがいないと、俺の剣を受ける者がいないの
だ」 リュウも、笑顔を見せた。 ミナモは、小さく頷くと、目を
閉じた。

突然、インターホンのブザーが鳴った。 「先生！こちらの女性が、
意識を取り戻しました。至急おいで下さい」 部屋にいたもう一人
の医者が返事をして部屋を出た。クロガも、それに続いて部屋を出
て、リュウに報告し、一緒に向かうことにした。

「具合は如何ですか？あなたのお名前をお聞かせ下さいませんか」
看護師の言葉に女性は辺りを見回し訊ねた。 「ここは何処です
か？ミナミアさまは…？」 「ここは、ミレニアル王国の医療施
設です。あなたのお名前をお聞かせ下さい」 「わたしは、メイヤ
と申します。ミナミアさまの侍女です。ミナミアさまはご無事
ですか？」

辺りを見回すメイヤの視線が、リュウの視線と繋がる。 「龍輔さ
ま？…」 メイヤの思いもよらない名前に、リュウは愕きメイヤに
近づいた。 「そなた、なぜ、その名前を知っているのだ」 リュ
ウは、メイヤに訊ねた。 「龍輔さまが、ミナミアさまをウイン
ガル公国に連れてこられ、ウインガル公国の兵士があなたを捕えま
した。それをミナミアさまがお助けになられて、転送装置を使っ
てあなたをもう一つの世界に送ったのです。そして、ミナミアさ
まも向かおうとしたのですが、大公さまに見つかってしまい、ミナ
ミアさまは、龍輔さまの記憶を消されてしまったのです。そして、

ウインガルの転送施設が破壊される事を知り、ミナミアさまは、破壊される前に私をもう一つの世界に送ってほしいと…ミナミアさまは？無事なのですか？」メイヤの問いかけにリュウが答えた。

「ミナミア姫は、爆破された転送施設から発見されなかった。

そなたは、転送装置を起動させたのか？」メイヤはほっとした顔をして答えた。

「はい、起動させました。ミナミアさまは無事に転送されたと思います。それと、私の独断でミナミアさまの消された記憶は、私が元に戻しました」その言葉を聞いたリュウは、部屋を出て、ミナモのもとへ向かった。

その頃、国王ガルドラと数人の者達で会議が行われていた。「ウインガル公国が肅清された今、異世界を繋ぐ転送装置はもう必要ないかと思われます。今後悪事に利用されないとも限らない事を考えると、我が王国の転送施設も解体しては如何かと、クロガ司令官、そしてリュウ王子もおっしゃっております」その言葉に国王も、「そうか、それがよいのかもしれない、さっそく研究者たちにその事を伝え、解体を急がせよ。それと、関係データも破棄する事を忘れずにな」「わかりました、さっそく関係者を集め取りかかります」

リュウは、静かに眠るミナモの横で手を握り、端正なその横顔を見つめていた。リュウは悩み、苦しんでいた。ミナモを大切に思う心が存在する記憶と、ミナミア…いや南美を愛する気持ちを持つ記憶2つの記憶が葛藤していた。死んだと思っていた南美が生きているかもしれないと知って、心は乱れていた。

ミナモの手が微かに動き、ミナモは目を開けた。「リュウ…さま…」ミナモが微笑む。「ミナモ、ミナミア姫が生きているかもしれないのだ」リュウの言葉に愕き、目を見開く。「本当ですか、リュウさま」頷くリュウ。ミナモの瞳から涙が溢れる。

「…よかった」　「クロガと話し、ミナミア姫をさがして、必ず連れてくる」

ミナモはそつと頷いた。

「クロガ司令官、捜索隊をすぐに編成して頂けませんか？異世界に飛んだミナミア姫を探して、こちらの世界に連れてきたいのですが」　「判りました、さっそく人選をいたします。出発はいつごろのご予定でしょうか？」　「できるなら、明日にでも出発したいが」　リュウの逸る心に気付いたクロガは、「今夜中に捜索隊を編成いたします」　と、一礼してその場を離れた。

部屋に戻ったリュウは、出発に準備をしていた。　「リュウさま！」　ノックと同時にクロガの声が響いた。　「何事ですか？クロガ司令」　「大変です、本日の会議で転送施設の解体が決まり、研究者の手により解体が進められております。

「なんだって！」　リュウとクロガは、転送施設に向かった。

転送施設では、解体作業が始まっていた。クロガが主任研究員と話している。　「リュウさま、ご安心ください」　話が終わり戻ってきたクロガが話す。　「関係書類は、破棄してしまったそうです。データはまだ、残っており装置も復旧が可能な状態だそうです。今夜中に復旧するように伝えましたので、あすの出発は問題ありません」

クロガの報告にほつと、息をつくリュウだった。

部屋に戻り出発の準備を終えると、ミナモのもとへ向かった。廊下を歩いていると

クロガと、医師が話をしているのが硝子越しに見えた。　「そんなばかな！なんとかならないのですか」　「我々も、最善は尽くしますが…なにぶんにもミナモさま傷の状態が酷いので、ここ2日が…やまかと…」　部屋から漏れる話を聞き、ドアの前で立ち尽くすリ

ユウ。「リュウさま…」　リュウに気がついたクロガは深々と頭を下げた。クロガの涙が…床に落ちる。（何故だ…なぜ…）

リュウは、ミナモの寝顔をじっと見ていた。考える事は出来なかった…なにも…。

リュウは気がつく、ミナモのベッドの横で椅子に座ったまま寝てしまっていた。リュウの肩には毛布がかかっていた。ベッドを見るとミナモがいなかった。リュウは立ち上がり部屋から出ようとすると、入口からミナモが入ってきた。「ミナモ!？」　昨日の弱っていたミナモとは別人のように元気なミナモにリュウは愕いていた。

「リュウさま?どうかしましたか?」　何事もなかったように微笑むミナモ。「だ、大丈夫なのか?」　リュウの愕いた顔を見て笑うミナモ。「さあ、今日は出発するのですよね、早く準備なさない」と　追いたてるように、リュウを部屋から送り出した。リュウが出ていくと、ミナモの顔は苦痛で歪んだ。

転送装置は完全に復旧できずに、転送は一人ずつしかおこなう事が出来なかった。最初にリュウが装置に入る。「それでは、転送装置を起動いたします」　オペレーターが捜査を始める。

突然、サイレンが鳴り響く。

「どうしたのだ?何かあったのか」

クロガが通信機で連絡を取ると、警備にあたっていた戦士が答えた。「ウインガルの残党と思われる者が転送施設に侵入いたしました…うわっ…」

戦士からの通信が途絶える。

爆発音と共に数名の兵士が転送室に入ってきた。

捜索隊に選ばれた者達は武器を持っておらず、敵の兵士に倒されていく。

「リュウさまの転送を中止するのだ」　クロガが武器を取って、オ

ペレーターに命令する。

「無理です、もう止められません。今止めるとリュウさまが危険です」

舌打ちをしたクロガが、数名を連れて転送室に向かう。

敵の兵士がリュウの入ったカプセルに狙いをつける。

レーザーの発射音！

しかし、倒れたのは的の兵士だった。

ミナモが武器を構えて立っていた。

「転送開始まで、あと15秒です」オペレーターの声が響く。

敵の兵士を次々と倒していくミナモ。

立つことなど出来ない筈の身体だった。

動くだけで、激痛を感じる身体だった。

（リュウを守りたい…）その想いだけが、ミナモを動かしていた。

上部の歩廊にいた兵士が、ミナモを狙っていた。

それに気付いたリュウは叫んだ。「ミナモ！上だ！」

しかしリュウの言葉は届かない。

敵兵士の放ったレーザーは、ミナモを打ち抜く。

後ろ向きに倒れるミナモ。

倒れながらその兵士を打ち抜く。

倒れたミナモはリュウに向かって微笑む。

そして、ミナモの唇が動く。

「ミナミリアをよろしくお願いします…」

声は届かなかったが、唇の動きでそう読み取れた。

…ミナモの笑顔が消え、目を閉じ頂垂れた。

「ミナモ！？…だれか、転送を中止するんだ！止めてくれ」

リュウは叫ぶもその声はカプセルの中で響くばかりだった。

最後に残った兵士が、カプセルに向かっていく。

転送室に入ってきたクロガのレーザーがその兵士を打ち抜く。
しかし、爆弾はカプセルに向かって放物線を描く…

そして…爆音と共にカプセルは吹き飛ぶ…

暗雲の壁

暗雲の壁

ミナミアは、ふと、空を見上げた。

そこには、街の灯りに邪魔され闇を纏えない雲が蠢いていた。その存在を気付かれないように…ミナミアは足を止め暫く空を見ていた。

（あの雲の向こうにあの人が…戻りたい、あの人のもとへ…）

あの日こちらの世界に飛ぶ寸前に、ミナミアの記憶は蘇っていた。

自分がこの世界の者ではなく、ウインガル公国の姫である事も…そして、この世界で出会い愛した人が自分と同じ世界の者で、敵対していた国のリュウ王子だった事も…。

しかし、ミナミアには戻るすべがなかった。

この世界で、鈴元南美として生きていこうと決めた。いや、そうすることしかできなかった。

いつものバーの扉を開けるとカウンターは半分ほど埋まっていた。南美は空いていた右の端に座りビールを注文した。

バッグから取り出した煙草に火をつけると一口吸いこみ、溜息と一緒に紫煙を吐きだした。

いくら時間が経っても龍輔を忘れる事が出来ず、どうしようもない虚しさだけが南美を包んでいた。

その虚しさを誤魔化す為に酒を飲み、そして酔いは、いつものように悲しみが頬を濡らす。

突然、南美の左側から手が現れた…

その手はハンカチをそつと置いた…

南美は後ろを振り返る…

男と視線が繋がった…

男は優しそうな笑顔を見せると…呟いた。

「南美、遅くなって…ごめんな」

龍輔の唇が…南美の唇に…

…優しく、触れた…

< 完 >

暗雲の壁（後書き）

こんな拙い、文章による表現力も乏しい物を、最後まで読んでくださった方には、大変感謝いたします。できれば、叱咤激励などを記入して頂けると、私にとってはとても嬉しいです^^

本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6159j/>

暗雲の壁

2010年10月9日17時28分発行